2022年9月17日（土）14:00 ～ 17:00（Zoom）

2日目

『カウンティング＆クラッキング』翻訳リーディング（前半）

○菅田　みなさま、お集まりいただき、誠にありがとうございます。「国際演劇交流セミナー 2022　オーストラリア特集～自らの声で語り始めた難民、国家の神話を語り直す先住民」2日目を始めたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。
では、『カウンティング＆クラッキング』リーディングの演出を担当した和田さんからのお話を聞きたいと思います。和田さん、お願いします。

○和田　国際演劇交流セミナーでは当初より、世界の演劇の今を知るために、翻訳リーディングを行ってきました。このリーディングは他の国の演劇人、それから、戯曲との出会いを中心に考えてきていますが、もちろん、日本の演劇人との出会いもずっと考えてきました。今回は公募による13人の俳優の皆さんたちがこの戯曲を愛し、この戯曲のために参加してくださいました。

3時間以上の大作ですので、当初はかなりカットして行うしかないと思っていましたが、実行委員の協議によりほぼ全編のリーディングとしました。日本語に翻訳すると1.5

倍長くなると言われていますので、多少のカットを入れ、3時間に纏めました。

英語とスリランカのタミル語・シンハラ語によって書かれた戯曲ですので、ト書きにその説明を入れました。佐和田敬司さんを中心に、原田容子さん、ネリダ・ランドさんに翻訳のチェックを入れていただき基本台本を作成し、稽古の中で俳優の皆さんと協議して上演台本としました。

全体の構成が、3幕15場で時間と空間が入り混じり、50人近い人物が出る戯曲なので、椅子に座ったままでのリーディングではなく、シンプルなステージド・リーディングで行いました。ト書きを増やしてストーリーテリングの役割とし、パイプ椅子4脚だけを置いて、公園や屋敷のベンチ、アパートのソファなどに見立てて行いました。

10日程のリハーサルでしたが、実行委員と俳優の皆さんが常に的確なアイデアを出して下さり、全幕のリーディングを纏めることができました。本日は第1幕と第2幕、そして明日3幕をお届けすることになっています。是非、最後までお付き合いください。

○菅田　ありがとうございます。では、続きまして、本日のリーディングを聴く前に作品の背景を簡単に紹介させていただきます。実行委員の公家さん、お願いします。

○公家　みなさんこんにちは。実行委員の公家と申します。これから10分ぐらい、リーディングの前にこれだけは押さえておきたいポイントを、みなさんと共有していきたいと思います。

Production Images by Brett Boardman, courtesy of Belvoir Theatre

◆『カウンティング&クラッキング』参考資料

●ものがたり

スリランカ内戦により難民としてオーストラリアに移住した女性ラーダとその家族の歴史と今を描いた物語です。

1956年から2004年までの出来事、となります。

第1幕は2004年です。

第2幕からは過去と現在を行ったり来たりするようになります。俳優がいくつかの役を演じますので、特に、第2幕冒頭シーンは混乱なさらぬようご注意ください。（配役も時代も場所も一気に変わります）

第2幕の冒頭シーンは、1956年のスリランカ。

第1幕は2004年です。ラーダの祖父であり政治家アパの屋敷内での出来事となります。

●タイトル

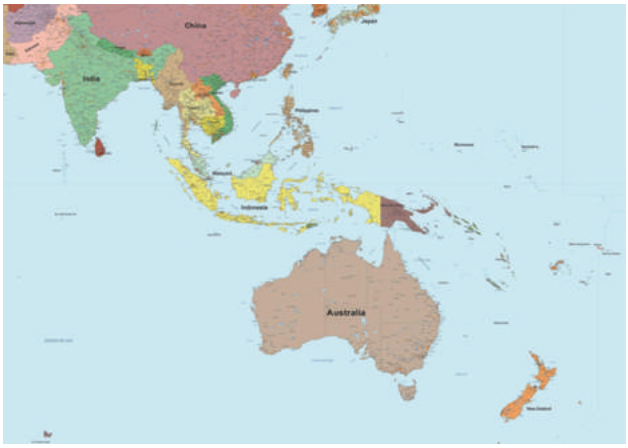
『カウンティング＆クラッキング』はラーダの祖父であるアパが第3幕で語るセリフのなかにあります。

民主主義とは、ある範囲内で頭数を数えること（Counting）、しかし、その範囲を超えたら割ってしまうこと（Cracking）。

●オーストラリア

オーストラリアは住居者の4人に1人が移民という多民族国家です。その民族数は500を超えています。

イギリスの植民地だったオーストラリアは1901年に連邦国として独立しました。植民地化される前は先住民のアボリジナル・ピープルが5万年以上も前から暮らしていました。



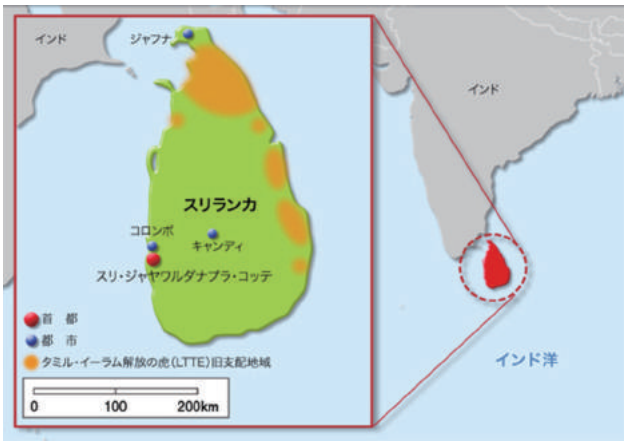
地図ですけれども、左側の地図、ご存じのオーストラリアです。そしてそこから左斜め上にのぼっていくと、緑の部分がインド、そのインドの先端からちょっと離れたところになる赤い部分がスリランカです。右側の絵をご覧ください。オーストラリアの地図ですけれども、右下のほうにシドニー、キャンベラの上のあたりにありますけれども、この辺りが舞台の場所となります。

つづきまして、作品のなかに、アボリジナルのリリーという若い女性が出てくるんですけれども、リリーの出身がアーネムランドのヨルングとなっています。アーネムランドというのは、オーストラリアの北部にある最後の手つかずの大自然が残っている場所です。そこにアボリジナルの人々が暮らしています。ヨルングというのは、ヨルング語で、人という意味を表します。

●スリランカ民主社会主義共和国

Democratic Socialist Republic of Sri Lanka

スリランカとは、シンハラ語で「光輝く島」という意味です。地図をご覧になってください。コロンボという地名が左下のほうにありますね。コロンボはスリランカ最大の都市です。



スリランカの首都はその下にある、スリジャヤワルダナプラコッテです。それからもうひとつ、重要な場所なんですけれども、最北部にジャフナという地名がありますけれども、ジャフナはタミル人の多く住む地域で、2009年まで26年間続いた内戦で、反政府派「タミル・イーラム解放の虎」の本拠地だった地域です。

●シンハラ人とタミル人

スリランカ民主社会主義共和国はシンハラ人が74%、主に仏教徒です。タミル人が18%、主にヒンドゥー教徒、そしてスリランカ・ムーア人など約2,000万人が暮らす多民族国家です。

シンハラ人は、北インドから上陸したアーリア系の民族とされます。タミル人は、主に南インドに住むドラヴィダ系の民族です。

スリランカの公用語はシンハラ語とタミル語ですが、両民族間をつなぐ言葉（連結語＝link language）として英語が使われています。3つの言語を使う、ということですね。

●1815年　キャンディ王朝の滅亡により、全島が英国の植民地となる

英国は”少数派”のタミル人を行政府官吏に重用し、“多数派”のシンハラ人を統治させる「分割統治」を行いました。その結果、少数派のタミル人のみが優れた教育を受け、社会的に高い地位を占めるようになりました。ここがとても重要なところだと思います。

●1956年のシンハラ人優遇政策

1956年第2幕冒頭シーンですね。

1951年にスリランカ自由党（SLFP）を創設したバンダラナイケ氏が、多数派のシンハラ人の利益を尊重する「シンハラ人優遇政策」を掲げ、1956年の選挙で圧勝。シ

ンハラ語を唯一の公用語とする政策など急進的な政治を展開する。それにより、少数派であるタミル人への差別が始まった。イギリスが統治していた段階では、少数派のタミル人が優遇されていた。ところがイギリスが離れると、マジョリティーであるシンハラ人と、マイノリティーであるタミル人の関係が逆転してしまった、ということです。

●タミル・イーラム解放のトラ（LTTE）（通称：タミルの虎）

「タミル・イーラム解放の虎」は、1976年、スリランカ北部及び東部におけるタミル人国家「タミル・イーラム」の樹立を目的として設立された武装組織である。一時は北東部の広範囲にわたる地域を支配下に置いた。また、海外では、慈善団体等のフロント組織を通じ、海外在住のタミル人から寄附を受け、又は強制的に資金を集めたほか、武器調達、宣伝活動等を行った。この辺のことも作品にちょっとでてきますので、覚えておいてください。

●タミルの虎　銃を手にした少女たち

これはいま、アジアンドキュメンタリーズというドキュメンタリー専門の配信サイトで配信されている映画です。タイトルは『タミルの虎 銃を手にした少女たち』

原題：Blizny ／英題：SCARS
2019年製作／作品時間79分
撮影地：スリランカ
製作国：ポーランド、ドイツ

内戦中、わずか17歳で「タミル・イーラム解放のトラ」に参加し、ラジオの宣伝放送でアナウンスをしていた女性が、かつての同志を訪ねて当時を振り返る。10代の少女たちが、なぜ銃を手にしなければならなかったのか。内戦は、少女たちにどのような傷を負わせたのか。彼女自身も片腕と片目を失いながら、終戦後も心身に傷を負った人々を支える活動を続けてきた。自らの青春を戦闘に捧げた少女たちが、敗戦後、社会から排除され、仕事の機会を奪われ、汚名を着せられてきたという現実。まだまだ未解決のままタブー視されるスリランカ社会の闇に、希望の光は射すのだろうか。

すごい映画でしたので、もし興味のある方はご覧になっていただければと思います。

●内戦の終結

2009年5月19日、スリランカのラージャパクサ大統領は国会で、政府軍と反政府武装組織「タミル・イーラム解放の虎」（LTTE）の間での内戦の終結を宣言しました。26年間で7万人以上の犠牲者を出したシンハラ人とタミル人の対立が形式上はここで終わる、ということになります。

●国内避難民28万人

それによって国内避難民28万人。激化した内戦によって、約28万人ものタミル人らが国内避難民（IDPs：Internally Displaced Persons）となり、避難民キャンプでの生活を余儀なくされています。

大体これぐらいのことを押さえておいていただければ、3時間の大作になりますけれども、十分楽しんでいただける作品だと思います。ありがとうございます。

○菅田　公家さん、どうもありがとうございます。

写真提供：Brett Boardman

◆ 佐和田敬司によるレクチャー

○**菅田**　続きましては、『カウンティング＆クラッキング』の翻訳者である佐和田さんに、この作品がオーストラリアで上演された時の話を伺いたいと思います。佐和田さん、お願いいたします。

○**佐和田**　みなさん、こんにちは。では、オーストラリアで上演された時の様子についてお話をしたいと思います。

オーストラリアでは、2019年の1月11日からシドニーで上演され、同じプロダクションが、3月2日からサウスオーストラリア州のアデレードでそれぞれ上演しました。

ベルボアというシドニーの劇団と、それから、昨日、シャクティさんからお話いただいたコー・キュリアス、シャクティさん率いる劇団ですけども、これらの合同上演ということになりました。

Counting&Cracking
オーストラリアでの上演

2019年
1月11日～2月2日　シドニー・タウンホール（シドニー・フェスティバル）
3月 2日～3月9日　リドリー・センター/アデレード・ショーグラウンド
（アデレード・フェスティバル）

ベルボア・ストリート・シアター＋Co-Curious

（写真を映す）

シドニータウンホール　写真提供：City of Sydney Archives

シドニーでは、シドニー・フェスティバルのプログラムの1つとして上演されたわけです。会場はシドニータウンホールです。この左側の写真を見ていただきたいんですけど、市街地で最も賑やかな場所です。右側の写真はその内部です。ここで上演されたということになります。

そしてアデレードでは、アデレード・フェスティバルのプログラムの1つとして、『カウンティング＆クラッキング』が上演されました。上演された場所は、アデレード・ショーグラウンドという、コンベンションセンターのようなところがあり、そこにあるリドリーセンター（Ridley Centre）という場所です。

リドリーセンター　写真提供：Adelaide Showground

リドリーセンターというのは1500人ぐらいの客席を設けることができる場所です。こちらはかなり郊外にありますけれども、フェスティバルで毎回使われる会場になっています。

私が『カウンティング＆クラッキング』を見たのはこのアデレードでのフェスティバルでした。

コー・キュリアス（Co-Curious）と共同制作したベルボア・ストリート・シアター（Belvoir St Theatre）についてちょっと説明します。

ベルボア・ストリート・シアター　写真提供：Belvoir

シドニーの主要な劇団の1つで、劇場を持っています。非常に立派な劇場で、ツアーを除くとほとんどの公演はこの劇場で上演するんですけれども、しかし例外的な作品というのがいくつかあります。そのうちの代表格が1998年に上演された『クラウドストリート』（Cloudstreet）という作品でした。

この『クラウドストリート』では14人の俳優が出演して40人近い役柄を演じ分ける非常に大規模な舞台でした。で、このベルボア・ストリートの劇場を飛び出して、シドニー・ダーリングハーバーという港があるんですけども、そこの巨大なドッグに砂を敷き詰めて上演をしました。

この『クラウドストリート』というのは、オーストラリアの人気小説家のティム・ウィントン（Tim Winton）という作家の原作小説を、オーストラリアの非常に重要な劇作家である、もう亡くなってしまいましたが、ニック・エンライト（Nick Enright）という作家が脚色したものです。2つの貧しい大家族が、パースのクラウドストリートにある大きな屋敷に一緒に暮らした20年間を描いた作品です。

この『クラウドストリート』はオーストラリア人って一体何なのか、という問題に迫るもので、最近もまた再演されたりして、現代オーストラリア演劇を代表する作品と見なされてきました。このため、シドニーの観客は『クラウドストリート』とこの『カウンティング＆クラッキング』を比較する人がとても多かったと思うんです。

つまり、白人労働者階級の貧しい家族という、『クラウドストリート』に描かれている登場人物たち。彼らを観客はオーストラリア人の象徴的な自画像、これこそオーストラリア人だ、という風に思う人たちが多くいた。で、それがウエスタン・シドニーの郊外に住むスリランカ人家族、つまり『カウンティング＆クラッキング』の登場人物たちに移り変わった。

オーストラリア人の象徴的な自画像は、白人労働者階級からスリランカ人家族に変わった、ということにオーストラリア演劇の語られる物語の20年間の変化というのを、みんな感慨深く見守っていたようです。

シャクティダランが『カウンティング＆クラッキング』で、そのニック・エンライト戯曲賞を、非常に地位の高い権威ある賞ですけども、これを受賞したというのは、非常に象徴的なことだったんじゃないかな、という風に思います。

この『カウンティング＆クラッキング』を見ていた観客は、フェスティバルの観客とイコールになるわけですよね。ということは何を意味しているのかというと、特定の劇団や劇場のファンではない人たちが多いわけです。

世界各国から集まった舞台芸術と、この作品を見比べるそういうお客さん、またさらにそのフェスティバルというのは演劇だけではないわけですね。舞踊やオペラや、音楽やビジュアルアーツや、映画まで様々な芸術のプログラムもあるので、観客はそれらも同時に見ているわけです。なので、観客層というのは非常に多様であると、普通の劇団が持っている顧客のようななじみ客とはまた全然違う雰囲気があるということです。

アデレード・フェスティバルというのは、国内で最も歴史のある1960年代に始まった国際芸術祭です。アデレード･フェスティバルのある南オーストラリア州は、フェスティバル・ステートと自ら名乗っているほど、フェスティバルが町の中心的なイベントとして位置付けられています。

もう1つのシドニー・フェスティバルはメルボルン・フェスティバルと双璧を成す、国内最大級の国際芸術祭です。この劇場内でどういうことが行われていたのかっていう

と、パフォーマンスは関係ないところなんですね。シドニーでは、そのホールの入り口でスリランカ料理が無料で振る舞われていました。

もちろん無料、というかチケット代に含まれていたんだと思うんですけど、私が観たアデレードではそういうサービスは残念ながらなかったんですけど、キッチンカーがそのホールの外に出ていて、そこでスリランカ料理が振る舞われていました。

次に、この『カウンティング＆クラッキング』の舞台の作り方についてもちょっとお話をします。真ん中に長方形の何もない舞台がドンと置かれている。そして周りを水が流れている。水路が設けられています。

写真提供：Belvoir

水はこの物語にとって重要なんですね。主人公のシダータがおばあちゃんであるダマヤンティの遺灰をジョージズ川に流すシーンからこの芝居が始まるわけです。また、シダータと彼のガールフレンドのアボリジナルのリリーという女の子が、自分に繋がる両方の家族が結び合うことを、ガンジス川と、リリーのふるさとアーネムランドのイルカラにある川の、水と水が混じり合うということに例えるんですね。

したがって水は、この作品を象徴するものとして舞台にずっと存在し続けていました。

長方形舞台を囲む三方向に木の観客席が組まれています。そして残りの一方に鉄製のゲートがあります。

難民になったシダータのお父さん、ティルーが収容されているヴィラウッド難民収容所の場面では、このゲートの向こうにたくさんの難民申請者が押し込められている、というような表現があります。で、ゲートの上に突き出された鉄製の棒があります。ここに今やってる場面の名前と場所の名前と、それから都市が記されたプレートがぶら下げられています。

それから、音楽に関しては、楽団のためのブースが設けられています。そこでスリランカの様々な伝統的な楽器で構成される楽団が、音楽を演奏していました。

音楽のほかにも、劇中でパソコンを操作するシーンがあるんですけども、そのウィンドウズの立ち上げ音とか、あるいはskypeを使ったりするんですけど、そのskypeの呼び出し音もこのスリランカの伝統的な楽器で演奏することによって、観客の笑いを誘ったりしていました。

それから俳優に関して。登場する俳優は16人です。この16人が6つの言語を舞台上で喋ります。サンスクリット語、タミル語、シンハラ語、ヨルング語、アラビア語、英語、この6カ国語です。特に、タミル語とシンハラ語の膨大な会話が交わされます。

今回の日本版では全て日本語での上演になります。けれども、オリジナルのプロダクションでは、舞台上で喋られるそれらの言葉を、舞台下に降りた俳優が英語で通訳して、同時に語る、そういう趣向が添えられていました。

写真提供：Brett Boardman

この戯曲はですね、完全版は日本でこれから出版されることになるんですけれども、どの台詞がタミル語あるいはシンハラ語だったかわかるようになっていますので、是非、出版されましたら手に取ってその本の中で確認してもらいたいと思います。

それから演者も6カ国から集まりました。その多数はオーストラリア人なわけですけれども、それでも、その1人1人がその文化的な背景は非常に多様なものを持っています。

（写真を映す）

その中でも主要な役どころの2人は初演時、まだ演劇学校を出て数年の若手俳優でした。主人公のシダータ役の彼は2014年にNIDA（国立演劇学院）という、この演出者協会の国際交流セミナーでも講師をしたことのある、オーブリー・メロー氏が、校長先生を務めていた学校ですけれども、そこを卒業したシヴ・パルカーという俳優、若い俳優です。彼はインド生まれの香港育ちだそうです。で、ある新聞のインタビューに「イ

Production Images by
Brett Boardman,
courtesy of Belvoir Theatre

ンドに戻っても自分は異邦人だし、香港でも異邦人だし、ここオーストラリアでも異邦人だ」という風に自分の文化背景の多様さについて語っています。

（写真を映す）

若いラーダ役のヴァイシュナヴィ・スーリヤプラカーシュという女性、この方もインド生まれで、シドニーに現在在住しています。2017年の、同じくNIDAの卒業生です。で、得意にしているインド伝統舞踊を作品の中で披露しました。この華やかなインド伝統舞踊はリーディングで再現することはできませんけれども、『カウンティング＆クラッキング』の見せ場の1つになっています。

Production Images by
Brett Boardman,
courtesy of Belvoir Theatre

それから、イスメ役のハゼム・シャマースは、パレスチナ系のオーストラリア人の俳優です。これらのオーストラリア人キャストに加えて、他の国々からも『カウンティング＆クラッキング』のキャストは集まっています。スリランカからはラーダ役と、それからニヒンサ役の俳優さん、そして、インドからはアパ役の俳優さん、昨日シャクティさんが紹介されましたけども、ボリウッド映画で悪役をやっている俳優さんです。

それから、フランスからはティルー役の俳優さん、そしてニュージーランドからはスニル役の俳優さん、マレーシアからはラーダのおばあちゃんであるアーチャ役の俳優がそれぞれ集まりました。こういったことからわかるように、俳優のネームバリューで観客が見に来るようなキャスティングではなかったということですよね。

もし、日本でこの作品が上演されるのでしたら、どんな人がどんな場所でどんな形がいいでしょうか。これを想像すると、オーストラリアと日本の演劇状況の違いも、もしかしたら浮かび上がるんじゃないかなと思います。ストーリーだけではなくて、ぜひその辺も想像しながら見てほしいと思います。ご清聴ありがとうございました。

○菅田　佐和田さん、どうもありがとうございます。

○**菅田**　では、大変お待たせいたしました。リーディング参加者の皆さんをご紹介いたします。ではお願いします。

（リーディング参加者が各々自己紹介する）

◆『カウンティング＆クラッキング』リーディング（前半）

○**菅田**　リーディング参加者の皆さん、どうもありがとうございました。
時間が迫っておりますが、少し時間があるので、協力のネリダさん、画面をオンにできますか。あまり時間はないのですが、この作品について何かお話しください。

○**ネリダ**　はい、短く、オーストラリア人代表として喋らせていただきます。
みなさんが気づいているかわからないんですけど、この作品に白人の人物は1人も登場していません。白人オーストラリア人として、私はすごく嬉しいですね。

みなさんはご存じだと思いますけど、先住人じゃないオーストラリア人である白人は、基本的にみんな移民なんですね。でも、イギリスから最初に移民した白人が主流になっています。イギリスから持ってきた演劇とその戯曲が主流になっていて、1960年代ぐらいに、オーストラリア人がオーストラリアの物語を書こうとした時に、イギリスからはそれこそ異邦人の劇として評価されました。

その時代から、戦後も、イタリア人とギリシャ人の移民の波、その次に東南アジア、そして中東、21世紀に入るとソマリア、アフガン、イラク、イランなどの戦場から逃げてくる移民の波。移民と難民の波の中、今、オーストラリアの人口の3割が移民です。

そして今、英語圏で初めて移民1世2世が人口の半分以上を占めるところまで向かっていますので、素直に、そのオーストラリアを表現する、白人が1人も出ない舞台があってもいいと思います。

○**菅田**　そうですね。

○**ネリダ**　そしてこれを観て、自分にとっての、私のオーストラリアはどこにあるのかと考えてみると、翻訳するプロセスで苦労した表現がいっぱいありました。オーストラリア人らしい言い方は、つっこみが多い、皮肉が多い、冗談が多い。それが私の知っているオーストラリアとオーストラリアの声、になっています。

じゃあ、今度、それをどういう風に日本人に通用する日本語に訳せばいいのか、というプロセスがすごく面白かったので、最初から最後まで、まだ最後じゃないですけど、それはプロセスなので、皆さんに少しでもそういう目で、現代オーストラリアは一応英語圏ですけど、移民こそ主流なんです、というところまできているということを意識して、是非観て楽しんでもらいたいです。

○**菅田**　そうですね。オーストラリアもどんどん変化していっているってことですよね。ありがとうございます。ネリダさんは、今回は協力という形で入ってくださって、ネリダさんも俳優として活躍もされているので、声に発する台詞を考えてくださいました。ありがとうございます。

では、本日は『カウンティング＆クラッキング』の翻訳リーディング、第1幕と第2幕をお届けいたしました。残る3幕のリーディングは明日となります。

そして、この戯曲『カウンティング＆クラッキング』の日本語版は発売予定だそうです。詳しくは、本日お知らせをメールで流しますので、どうぞご覧になってください。

本日は最後までおつき合いくださいまして、誠にありがとうございます。

『カウンティング&クラッキング』あらすじ

＜第１幕＞

●第１場

2004年３月（夏）のシドニー、ジョージズ川のほとり。

サリーを着たラーダが、ヒンズー教の僧侶に依頼し、大学生の息子、シダータと共に、母ダマヤンティの遺灰を川に流すところから、物語は始まる。ラーダは48歳、シダータは20歳。僧侶の指示により祖母の遺灰を川に流したシダータが去ると、ラーダはタッパーに入れた祖父の遺灰を取り出す。祖父の遺灰の供養を僧侶に頼むが、「正しい時に正しく行わなわなければならない」と断られてしまう。その遺灰は、21年前に息子を身籠った27歳のラーダが内戦激化のため、夫ティルーが政府によって殺されたと告げられ、息子を守るために祖国スリランカを離れ母の住むオーストラリアに移住した時に持ってきたものだ。それ以来、誰にも話さず、ベッドの下に置いている。

●第２場

その夜、シダータは大学のパーティーで、アボリジナルの女性リリーと出会う。２人は互いに惹かれ、パーティー会場を出て、公園に向かう。リリーは法律を、シダータはジャーナリズムを学ぶ。リリーはシダータに母親との関係を尋ねるが、シダータは多くを語りたがらない。２人はお互いのルーツとしての神話や、社会に対する疑問や境遇や考えを語り合うことで交わる水のように意気投合していく。夜が明けていく中、２人はキスをする。

●第３場

別の日。ラーダのアパート。

父母の荷物を必死で整理し、スリランカの記憶から離れようとしている。市の清掃局と電話でもめていると、シダータの隣人でトルコ人のエアコン屋・イスメがシダータに頼まれて、エアコン設置の工事に訪れる。同時に、スリランカの募金活動の人がシダータを訪ねてやってくる。ラーダは「反政府組織タミル・イーラム解放のトラ（LTTE）」に関わる活動だということを知ると、シダータに関与しないでと言い、激しく彼を追い返す。イスメはラーダに好意を持ち、話しかける。感情の高ぶるラーダも楽天的なイスメとの会話で少しほぐれる。

●第４場

その頃、スリランカのコロンボの刑務所で、ラーダの夫ティルーが突然の釈放となる。

看守は、観客に国民的競技クリケットのオーストラリア対スリランカ戦における

オーストラリアの反則への怒り、スリランカ内戦での「反政府組織タミル・イーラム解放のトラ（LTTE)」への憎しみの話をし続ける。2002年より内戦は停戦、しかし不安定。

●第5場

別の日。イスメとシダータの住むアパート。イスメはイタリアに住む息子と話すために、シダータにスカイプのつなげ方を教わる。ラーダに好意を持ったことを打ち明け、メールでラーダを食事に誘う。シダータは訪ねてきたリリーを食事に誘う。リリーの嬉しい返事に歓喜するシダータ。2人はトランプに興じる。平和な日常の時が流れる。

●第6場

コロンボ。21年前にラーダとティルーが共に暮らした屋敷。ラーダから買い取ったインドの武器商人スニルが、ヒンズー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』を引用しながら停戦後の自らの仕事を正当化し、イタリアの武器商人と交渉している。

そこへティルーが現れる。かつての家政婦ニヒンサがこの家に残っており、彼の帰りを喜ぶ。そこへ旧知の記者のハーサンガがやってきて、釈放の経緯、ラーダとシダータが今はオーストラリアにいること、再び政府軍に捕まるリスクがあることを告げる。北に逃げるよう伝えるが、ティルーはラーダのいるオーストラリアへの渡航を望む。パスポートが出る可能性は無く、唯一の危険な手段として、オーストラリアへ難民として渡ることを決意したティルーは、『バガヴァッド・ギーター』の言葉でスニルに援助を求め、金を受け取る。ティルーはハーサンガにラーダに電話かけてほしいと頼む。

●第7場

ラーダのアパート。ハーサンガからの電話でティルーが生きていたこと、そして釈放されたことを知ったラーダは激しく戸惑う。ティルーに代わるが、電話を切ってしまう。再び電話を掛けたハーサンガに30分後に電話してと告げる。

＜第2幕＞

●第1場

1956年のコロンボ。ラーダが生まれた翌日の平和な朝。

ラーダの祖父アパと祖母アーチャの家。アパは貧しい北部の出身だったが、数学者として地位を得、現在の与党である統一国民党の通産大臣を務めている。平等を掲げるアパは、ティルーの父の果物売りのバラに資金援助をしている。同じ党のヴィンサンダが訪れ、野党にスリランカの公用語にシンハラ語の単一政策の動きがあり、集会

の熱気が高まっていること、タミルとシンハラの主導を巡る政治闘争が急速に激化していることを告げる。そして統一国民党が選挙に勝つためにシンハラ語単一化政策を決め、タミルであるアパは内閣の会合から外されたことを知る。アパは統一国民党を去ればヴィンサンダとは政敵になると言う。

●第2場

2004年のラーダのアパートにシダータが訪れる。ラーダはシダータに父が生きていて、電話が来ることを伝える。電話に出たシダータは、父ティルーと初めて話す。ティルーはラーダとシダータが受け入れてくれるなら、オーストラリアに行きたいと訴える。ラーダは沈黙したまま。 ともかく捕まらないために難民としてスリランカを脱出すること、また連絡をすることを約束するティルー。だが連絡がないまま、時が過ぎてゆく。

●第3場

1977年コロンボ。アパとアーチャの家。大臣の息子とタミルの娘の婚礼が行われている。 内戦は続いている。家政婦ニヒンサの夫が共産主義者の活動に加わり警察を襲撃。

アーチャはヴィンサンダの息子のハーサンガとラーダを結婚させようとしている。そこへバラの息子で技術者になった、ラーダの幼馴染みの若いティルーが妹のスワティーを連れてやってくる。内戦が続いていて、スワティーの友達が警官に殺され、ティルーはスワティーの身を守ってほしいとアーチャに頼む。しかし、スワティーは「反政府組織タミル・イーラム解放のトラ（LTTE)」として戦うことを選び、去っていく。

そこに牢獄に入れられ椅子に縛られたアパが運ばれてくる。統一国民党の「テロ防止法」に反対し、成立させないために抗議を続けたため、ヴィンサンダによって牢獄に入れられたのだ。統一国民党が選挙に勝つため、シンハラの村人を追い払ったこと、タミルの抵抗者が殺され家を追われ捕まったことなど、民主主義から独裁制に堕ちてしまったことに抗議するアパ。村人は武装し暴力的であり、スリランカの秩序を守るためだというヴィンサンダ。ラーダは抗議のために自らをアパの椅子に手錠で繋ぐ。そして、アーチャの希望するアパの政敵ヴィンサンダの息子ハーサンガとは結婚しないと告げる。「婚礼は政治よりも大事であり、女性は政治家よりも上手に家族を導く」ことを宣言させる。そして、結婚したいのはティルーだと告げる。

●第4場

2004年。シダータが初めてリリーを連れてラーダのアパートを訪れる。ラーダは

優しくリリーを受け入れる。そして、ティルーからの電話を待つ。密航業者に金のネックレスを渡し、電話を借りるティルー。シダータはリリーを紹介する。密航業者の船に乗りオーストラリアへ向かうというティルー。危険であり必死で止めようとするシダータ。だが、それが唯一の方法だと告げるティルー。彼はラーダに会いたいと告げ、船に乗ってよいか訊く。ついに、ラーダは「来て！」と答える。ティルーは船に乗る。

そうしてオーストラリアの難民協定による自分の亡命の権利を主張し、定住する機会が与えられることを求める。

＜第３幕＞

●第１場

1982年、コロンボにいる80代のアパがルービックキューブをしている。同時に2004年、シダータのアパートの玄関。シダータがスリランカの民族衣装でリリーの前に現れる。（ティルーの居る難民収容所にゆく日の準備だと後で判る）　シダータは語り始める。今、自分が帰属意識を持てる場所を求めていることを。リリーにプロポーズする。リリーも話す。自分の土地アーネムランドへの思い、自分たちと世界のつながり、シダータへの思いを。そして、一緒に暮らすことを考えると告げる。２人は出かける。

●第２場

1982年、コロンボ。ティルーと結婚し、４か月の子どもを身ごもっている若いラーダ。数学の教師をしている。ティルーは建築の技術者の仕事。幸せな時。だが、スリランカの内戦は激化している。ティルーの妹スワティーはタミルの虎の活動を続け、女性を集めている。アパに商店街で暴動が起きているという電話がかかる。アパは警察所長に電話し、鎮静を頼む。だが、警察は動かない。次に大統領に電話する。彼も口ばかりで、動かないことが解る。暴動は拡がる。スワティーのせいで、ティルーとラーダに危険が及ぶと警戒するアパ。なぜカースト制度の国で、身分の低いティルーを選んだのかと、ラーダに問うと、愛しているからだと答える。それを教えてくれたのはかつてのアパだと反論するラーダ。結婚は別だというアパ。ラーダが望むのは、かつてのアパが語っていたように、シンハラとタミルの対立ではなく、全てのスリランカ人に呼びかけての平和と平等。しかし、今はタミルを守る戦いが必要だと主張するアパ。村の女性たちが醸造酒作りの文化を英国の妨害から酒の甕を割って守った話をもとに、民主主義とは、「ある範囲で頭数を数えること、その範囲を超えた時は割ってし

まうこと（Counting & Cracking)」と学んだと話す。暴動は激化する。ティルーから電話がかかり、待ち合わせ場所を決めるラーダ。オーストラリアで仕事をしているラーダのアーマ（母）ダマヤンティから電話がくる。ラーダの身が危険であること、お腹に宿っている子どもシダータの安全のためにもオーストラリアに来るよう必死で話す。ラーダは決断できず電話を切る。

●第３場

2004年、ラーダのアパートではラーダが若い時のサリーに着替える。同時に、1983年のコロンボでアパの葬儀が行われる。暴動は続いている。ハーサンガが若いラーダの母に頼まれてオーストラリア行きのビザを入手したと告げにくる。僧侶がアパの遺灰を若いラーダに手渡す。ハーサは、暴動が激化していること、スワティーの死、そしておそらくティルーは政府によって殺されたと告げる。スニルが来て、屋敷を買いたいという。ラーダはオーストラリアに行くために、屋敷を売る決意をする。

●第４場

2004年。サリーを着たラーダが、シダータとリリーと待ち合わせるために電車の最後部の座席にいる。同時に、1983年の若いラーダがアパの遺灰を持って飛行機の座席にいる。若いラーダが去ると、シダータとリリーが現れる。２人はラーダを見つけ、隣に座る。電車が発車すると、ラーダは２人にスリランカの思い出を、静かに語り始める。そして、シダータを守るためにオーストラリアに来たことを告げる。そしてハーサンガがジャーナリストとしての命懸けの思いを書いた記事をシダータに渡す。シダータは記事を読む。ラーダはスリランカへの思いを告げる。電車は難民収容所のあるヴィラウッド駅に着く。３人はヴィラウッド難民収容所に向かって歩き始める。収容所に到着する。ティルーが現れ、家族は抱擁する。出演者全員が現れ、観客に挨拶する。

『カウンティング＆クラッキング』＜登場人物＞

★ほぼすべての人物は英語を話す

《主な登場人物》

ラーダ（シダータの母、数学者）〈タミル語・シンハラ語話者スリランカ人、48歳〉

シダータ（人文・メディア・スタディーズ専攻の学生）〈英語話者、20歳〉

リリー（シダータの恋人、法学部学生）〈アボリジナル、ヨルング語話者、20代前半〉

ティルー（シダータの父、技術者）〈タミル語・シンハラ語話者スリランカ人、48歳〉

ダマヤンティ（シダータの祖母）〈タミル語・シンハラ語話者、20代、50代〉

アパ（シダータの曾祖父、政治家）〈タミル語・シンハラ語話者、50代、80代〉

アーチャ（シダータの曾祖母）〈タミル語・シンハラ語話者、50代、70代〉

ニヒンサ（家政婦）〈シンハラ語話者スリランカ人、片言の英語、20代、40代、70代〉

☆若いラーダ（ダマヤンティの娘、数学教師）〈22歳、27歳〉

☆若いティルー（果物売りのバラの息子、技術者）〈22歳、27歳〉

ハーサンガ（ヴィンサンダの息子、記者）〈20代、40代〉

ヴィンサンダ（アパの政敵）〈シンハラ語話者スリランカ人、50代、80代〉

バラ（ティルーの父、ジャフナ出身の果物売り）〈タミル語話者、片言の英語、20代〉

スワティ（ティルーの妹）〈タミル語話者スリランカ人、10代〉

マイスリ（ニヒンサの息子）〈シンハラ語話者、英語は話せない、20代〉

《そのほかの登場人物》

スニル（武器商人）〈タミル語話者インド人、60代〉

僧侶（ヒンズー教の僧侶）〈タミル語話者スリランカ人、90代、50代〉

イスメ（トルコ系オーストラリア人）〈アラビア語話者〉

募金活動家（スリランカ系オーストラリア人）〈タミル語話者〉

看守（シンハラ人）〈シンハラ語話者〉

警察官（シンハラ人）

花嫁（シンハラ語話者）

レヴィ（武器商人）〈イスラエル人〉

男性の召使（シンハラ語話者）

屋台のホッパー売り（タミル語話者、英語話せない）

集まった人１（タミル語話者、片言の英語）

集まった人２（シンハラ語話者）

集まった人３（タミル語・シンハラ語話者）

警察官２（シンハラ語話者、英語話せない）

密航業者（インドネシア人）

亡命希望者

タミルの虎士官

果物売り（タミル語話者、英語話せない）

ペターの店主（タミル語話者）

交換手（シンハラ語話者）

ペターの警察署長

ウェラワットの商店主（タミル語話者、片言の英語）

警視総監

ミセス・クマラスワミイ

大統領

ジャニニ

アリフ（タミル語話者）

マヤ

クンサヴィ

暴徒

出棺の人

引っ越し業者